

# 学習者をつくるルーブリックの効果 —英作文パフォーマンス課題を通して—

## 1. 背景

学習者が見通しを持ち、課題に取り組むことができるよう、著者は学習者とともにパフォーマンス課題評価用のルーブリックを作成する取り組みをおこなっているが、これまでその効果を定量的に示すことができなかった。

### ルーブリック作成プロセス

- ①教師が生成AIを活用して質が異なる作文例を複数作成する
- ②学習者がこれらの作文例を比較・分析する
- ③②をもとに学習者が班でルーブリック記述文を作成する
- ④各班のルーブリックを比較し、クラス全体で最も良いものを選ぶ
- ⑤各クラスで選ばれたルーブリックを教師が1つにまとめる

<b>A</b> 特に優秀	・客観的な根拠や具体例が複数ある ・論理表現が適切に使われている
<b>B</b> 全員到達可能	・サポートとして不十分でも、客観的な根拠や具体例がある ・論理表現が使われている
<b>C</b> 頑張ろう	・根拠や具体例がない、客観性を欠く ・論理表現が使われていない

図1 課題1で採用したルーブリック

## 2. 目的と検証方法

### 目的

学習者がルーブリック作成に参画することが課題の達成度と与える効果を定量的に明らかにするため

### 方法

2回の英作文課題を設定し、表1の通りA群・B群においてルーブリック作成への参画に差を設けた。

表1 課題とルーブリック作成の有無

	課題1	課題2
A群	ルーブリック作成	ルーブリック提示のみ
B群	ルーブリック提示のみ	ルーブリック作成

課題のスコアをルーブリックの達成度に応じて1～5の値で表し、  
①A群・B群の課題1のスコアを用い、ルーブリック作成の有無による差を検証  
②B群の課題1と課題2のスコアを用い、ルーブリック作成への参画の前後でのスコアの変化を検証  
③2回の課題を終えてのリフレクションから、①②の原因を分析

## 3-1. 検証結果①：課題のスコアのt検定

- ①ルーブリック作成の有無による差はあるのか？  
有意差は認められなかった（図2）

	n	M	SD
A群	66	3.35	0.79
B群	67	3.22	0.79

p≈0.36

図2 対応のないt検定の結果

- ②ルーブリック作成による変化はあるのか？  
有意差はないものの有意差ありに近い結果だった（図3）

n	pre		post		p
	M	SD	M	SD	
66	3.20	0.80	3.44	1.16	0.07

B群のうち、2回のデータがある者のみ

図3 対応のあるt検定の結果

### 結果

- ①ルーブリック作成に参画した集団としなかった集団とではスコア（英作文の質）に有意差は認められなかった
- ②同一集団においては、有意差はないものの、ルーブリック作成を経験することでスコアの向上が見られた

## 3-2. 検証結果②：学習者のリフレクション

課題1・2の両方を終えてから、学習者に以下の2つの設問を含めたリフレクションをGoogleフォームで実施した。

設問1 writing課題の評価基準をみんなで作りましたが、自分たちでつくった時とそうでない時で課題への取り組みは変わりましたか？  
設問2 「変わった」場合はどのように変わったのか、「変わらなかった」場合はその理由を教えてください。

設問1の回答は図4の通りであった。設問2については、「変わった」理由は評価基準を意識して書くことができたからという趣旨のものが多く、「変わらなかった」理由はこれまでと基準が大きく変わらなかったからという回答がほとんどであった。

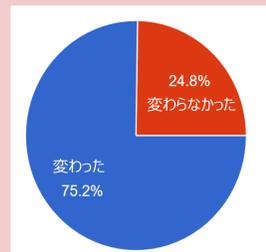


図4 設問1の回答

### 結果

- ①学習者の約4分の3はルーブリック作成の効果を実感した
- ②ルーブリック作成によって、学習者は評価基準を意識して課題に取り組むことが促された
- ③学習者が作成に参画したルーブリックがこれまでの評価基準と似ていた、あるいは学習者がもともと評価基準を意識していた場合は、ルーブリック作成の効果は感じにくい

## 4. 考察

検証結果より、次のことが示唆される。

- ①学習者がルーブリック作成に参画することは、評価基準を意識して課題に取り組むことを促す（学習者エンゲージメントを高める）
  - ②学習者が評価基準を意識することは、課題の達成度（英作文の質）の向上の一因となり得る
- ただし、検証方法において対象者や課題の数が限定的で、課題のレベルや内容を十分考慮できていない点に留意する必要あり

### 参考文献

サックシュタイン、スター著、高瀬裕人・吉田新一郎訳（2018）『成績をハックする 評価を学びにいかす10の方法』新評論  
 サラ・マーサー、ゾルダン・ドルニエイ著、鈴木章能・和田玲訳（2022）『外国語学習者エンゲージメント 主体的学びを引き出す英語授業』アルク  
 立花直樹（2025）「パフォーマンス課題に向けて学習者とルーブリックをつくる —生成AI活用の可能性—」『研究収録』大阪府高等学校英語教育研究会、No. 60、1-5頁